

報 告

ゼミ活動としてのオペレッタ公演の実践 ～表現活動を通して得られる学生自身の学びに焦点を当てて～

Implementation of operetta performance as a seminar activity
- Focusing on students' own learning through expressive activities -

阿部 真子*¹

要約：筆者が2014年度から京都市内の私立大学において行ってきた「教育職を目指す大学生がオペレッタ（劇あそび）を準備して、近隣の児童館や保育園などの子どもたちの前で発表する」という取り組みについては、学生自身の学びだけでなく、地域連携の視点からもその意義を認められてきた。そこで今回は、舞台を兵庫県赤穂市に移し、教育専門演習（いわゆる3年生ゼミ）の活動として、一つの公演に取り組むことで学生たちの意識がどのように変化したのか、この公演が学生たち自身の気づきや学びにどのように結びついたのか、学生への事後アンケートを中心に考察を行った。

その結果、学生たちにとって「大変だったからこそ頑張って、みんなで一つのものを作り上げた」という達成感は、「子どもたちが楽しんでくれた」という手ごたえを感じることで倍増し、最終的に「楽しかった」という本人たちの満足度に結びつくことが分かった。また、それは決してもともと友達同士の仲間だからこそ得られる満足ではなく、「名前も知らなかった人」と一緒に、時間的にも精神的にも追い込まれる中でコミュニケーションを取りつつ協力し合い、意見を出し合い、最終的に作り上げたことによる充実感も含まれていると考えられる。さらに、教職保育職において「見通しや計画性」や「ひらめき・発想力」が非常に大切であることを実感するなど、学生自身の気づきや深い学びにも役立つことが示された。

Key Words：学生自身の学び、表現活動、地域連携、芸術文化振興、ゼミ活動

1. 研究の背景

筆者は京都市内の私立大学で2014年から、教育職を目指す大学生がオペレッタ（劇遊び）を準備して、近隣の児童館や保育園などの子どもたちの前で発表するという取り組みを行ってきた。この活動はそもそも、普段、表現活動の体験に乏しい大学生たちが人前で演じる行為を通し「表現する」ことの意義を見出すことを目的としているが、同時に、全員が裏方スタッフとしての何らかの役割を担うことにより、一つの舞台を作る上で必要となる様々な事柄を理解し、将来、実際に教育現場で働く上で活かせるスキルを身に付けることができることが、これまでの研究で明らかになっている。¹

さらに、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により対面での公演が難しくなった2020年度には「大学と子ども園（保育園）をオンラインでつないだ双方向型でのオペレッタ公演」を企画し、その実践過程での様々な問

題点、その修正方法を模索しながら公演を実現することで、オンラインにおける双方向型公演の新たな可能性を探る研究を行なった。ⁱⁱ

これらの研究によって、このような活動が公演を行う学生たちの気づきや深い学びにつながるだけでなく、地域の子どもたちと触れ合うことで地域連携の観点でも非常に大きな意味を持つことが明らかになったが、やはりオンラインよりも対面での公演のほうが直接的に高い満足度が得られることが分かった。そこでコロナ禍3年目を迎え、少しずつ行動規制が緩やかになりつつある今年度（2022年度）は舞台を兵庫県赤穂市に移し、再び対面での公演を企画した。公演の場所を赤穂市に設定した理由は、当大学が市内に存在する唯一の大学であることから、文部科学省の推進する「開かれた大学づくり」の一環としてこの活動が役立てると考えたことにある。また、赤穂市は市内でこのような子ども向けの文化的なイベントがそれほど多く開かれていない自治体であり、今回の公演が成功すれば、今後、赤穂市における子どもを巻き込んだ文化振興に当大学が関わっていくための足掛

2022年11月15日受付／2023年1月11日受理

*¹ ABE Shinko
関西福祉大学 教育学部

かりを築くという効果も期待できる。

この公演の特徴は、参加学生を「教育専門演習Ⅰ（いわゆる3年生ゼミ）」で筆者のゼミを希望した者としたことにある。その設定理由としては、主に以下の3点があげられる。まず一つ目は、対象の学生たちが入学時にコロナ禍によるリモート授業から大学生活をスタートした学年であり、本来、入学当初に築くべき同学年間のコミュニケーションに乏しい傾向がみられることである。2年次までに授業内などでグループ活動をする機会があっても、学籍番号が近い者同士などほぼ同じメンバーでの活動に限定されていたため、今回の活動当初には3年次生にもかかわらず1度も話をしたことがないメンバーが多くみられた。自身が選んで所属したゼミだからこそ、責任をもって、新しい仲間と一つの舞台を作り上げるといった困難を乗り越えることができると考えた。そして、二つ目の理由としては、当該学年は、前述のようにコロナ禍により本学での実習学年である3年次まで子どもたちと実際に触れ合う活動をしてこなかったため、このままで実習に行けるのだろうかという不安を抱えている者が多い学年であることが挙げられる。この活動を通して、人の前に立つこと、子どもと触れ合うことを少しでも体験しておきたいという希望を持つ者が集まることが予想されたからである。そして三つ目の理由は、「表現とは何か」という筆者のゼミの研究テーマを把握した上で自ら志望して表現活動に参加することで、卒業研究として取り組みたい自身の研究テーマを見出してほしいという筆者の強い思いにある。

このようにして集まった学生たちが「ゼミ活動」として一つの公演に取り組むことで、彼女たちの意識がどのように変化したのか、この公演が学生たち自身の気づきや学びにどのように結びついたのか、学生への事後アンケートを中心に考察を行う。

2. 公演の概要

(1) 参加学生の募集

当大学教育学部児童教育学科では教育専門演習（以下3年生ゼミ）の配属は原則的に学生自身の希望調査を基として行われる。2022年度の場合は、学生は3月29日の次年度オリエンテーション時に発表されるコースごとの担当教員一覧から、自身の研究したいテーマに近い教員を選び2週間程度の面談期間を経て、最終的に希望するゼミを選んだ。希望人数の偏りにより、多少の調整が行われることがあるが、基本的には希望が最優先され、

この3年生ゼミの担当教員が、そのまま4年生での卒業研究の指導教員になることが原則とされている。

筆者の担当は児童教育学科の中での幼児コース（主に幼稚園教諭・保育士を目指す学生が所属する）であり、学生に示したゼミでの指導内容（抜粋）は「さまざまな“表現”のあり方について研究を進める。文献で調べ、相互にディスカッションを行い、さらには実際の表現活動を自ら体験する。」とした。筆者が当大学で3年生ゼミを担当するのは初めてであることもあり、面談希望者は20名ほどに上ったが、それらの学生の多くが真っ先に質問事項に挙げたのが「表現活動って何をやるのですか？」であった。それらの学生に筆者が説明した事項は以下のとおりである。

- ・表現活動は子ども向けの劇あそび（オペレッタ）の公演を考えている。
- ・その公演は前期終了前（7月下旬ごろ）に実際の子どもたちの前で発表する予定。ただし、新型コロナウイルス感染症の感染状況によっては、対面での公演は難しいかもしれない。
- ・公演には全員が必ず、実際に舞台に出てたと一言であってもセリフを話す「演じる側」と、様々な準備をする「裏方スタッフ」の両方を担当することとする。
- ・道具類や背景など、準備に必要なものは自分たち全員で分担して製作する。
- ・週1回の授業時間だけで、製作物と劇の練習を全て準備することは不可能なので、お互いに空き時間等を利用してもらう必要がある。
- ・卒業研究へのテーマは最終的にこれらの活動などを通して見つけてもらうことになるが、少なくとも前期の間はそれらについてゼミの時間内で個別に指導を行うことは不可能となるので、授業時間外を使用して、数度の教員と学生との面談を行うことになる。

以上の面談を経て、最終的に筆者のゼミを希望した学生は14名。実際にはそのうち体調不良により前期途中から欠席した1名を除く13名での公演となった。

(2) 公演までのプロセス

① グループ分けと演目の決定

前述の配属発表が4月末に行われた後、実際に全員が集まったのは大型連休終了後の5月上旬。そこで改めて企画についての詳細を発表し、具体的に公演に向けた話し合いが行われることになった。

まず、グループの選定である。総勢14名での公演となると、全員が出演する舞台はかなり大掛かりなものになってしまうため、今回はあえて、7名ずつの小グループで2公演を行うことになった。グループのメンバー決定については学生同士の希望を募り、人数バランスを考慮して配分した。多くの学生が普段から交流のある2～3人と一緒にゼミに参加している反面、3年生になるまで話をしたこともないという学生もいるという状況であったため、あえて交流のある者と無い者を混在させる形をとった。

そしてグループごとに、演目と、裏方スタッフとしての役割分担、出演者としての配役の話し合いを行った。

演目については、幼児から小学校低学年向けの市販のテキストをいくつか参考に提示し、その中から選んでも、新しいものを自分たちで作成しても良いことにした。今回、実際の準備期間が5月上旬から7月中旬ごろまでと非常に短いことから、両グループが既成のテキストを基本に自分たちで改良した形での公演を目指すことになった。最終的に選ばれた演目は、多くの子どもたちにある程度馴染みのある物語の方が伝わりやすいのではないかという観点から、それぞれ『白雪姫』と『ヘンゼルとグレーテル』となった。

裏方の役割分担としては、リーダーを中心に、衣装・大道具・小道具・照明などを決めていったが、今回は少人数での公演であるため、各係はその部門の統括に過ぎず、実際の衣装の準備や道具類の製作などは全員で行うということを確認した。

そして、いよいよ配役の決定であるが、ここではどちらのグループも7名の出演者をどのように配置するかという話し合いに多くの時間が割かれていた。

例えば『白雪姫』グループでは、絶対不可欠な登場人物として、まず白雪姫・王子・継母の3名を決定し、原作では7人いるはずの小人を3人にする代わりに、継母の言葉を受ける“鏡”の役を設定するほうが、話の全体の流れが伝わりやすいのではないかという話し合いが行われ、さらに、随所に現れる「歌」の部分のピアノ伴奏を誰が受け持つかを考慮しながら慎重に配役を決めていった。

もう一方の『ヘンゼルとグレーテル』グループが当初選んだテキストは、すでに森の中で迷ってしまったヘンゼルとグレーテルの兄妹が、木の葉の精などに導かれお菓子の家を発見し、魔女から逃げて家に帰るといった設定になっていた。これに対し、このグループは「そもそも

この童話は子どもたちに何を伝えたいのか？」という教材観を考えるとところからスタートし、「なぜこの兄妹は森に迷い込んだのか？」「魔女を退治するという(残酷な)行為を見せることは子どもたちに本当に必要なのか？」などの問いを設定し、様々なバージョンの「ヘンゼルとグレーテル」を読み直して比較することにより、一つ一つ自分たちが納得する物語に仕上げる方向で進めていった。例えば子どもたちが森で迷った原因は「継母によって森の中に捨てられた」「自分たちで遊びに行き迷ってしまった」「悪戯でミルク壺を割ってしまった罰として森に毒を摘みに行った」などいくつかのバージョンが挙げられ、「悪いことをして大変な目に遭ってしまったというのが、子どもたちには一番しっくりくるのでは？」などの意見から、悪戯の罰という案が採用された。そのように台本を自分たちで書き直していくうちに、登場人物はヘンゼル・グレーテルの兄妹と魔女、兄弟に罰を言いつける母親と、森に魔女がいることを母親に知らせて一緒に探しに行く父親という5名だけでいいのではないかという結論に至り、主役級の2人(ヘンゼルとグレーテル)を前半・後半のダブルキャストという決定がなされた。なお、こちらの組では当初、魔女役の学生が体調不良で参加できなくなり、後日改めて配役を見直す必要が出てきた。その際に様々な原作の中に「母親＝魔女」というものが少なからず見受けられる点などを考慮し、母親役の学生が魔女役を兼ねることになった。ただし、原作では兄妹が魔女を退治して家に帰ると母親がいなくなっていたことから「母親＝魔女」を示唆するものもあるが、今回は「子どもたちにとってお母さんは安心して存在であってほしい」という学生たちの意向で、退治される魔女と実際の母親に因果関係を持たせず、全く別の人物という設定で進めることになった。

このように両グループともに、配役を考えながら、少しずつ既成の台本の不自然な点などの修正を行っていった。その際に注意したのは、やはり「教材観」である。前述の「ヘンゼルとグレーテル」の例と同じく「白雪姫」も「この話を知らない子どもが見ても分かる」ことを大事に、話し合いを繰り返しながら修正を加えていった。

② 公演に向けて

演目や役割分担が一通り決まり、台本の修正ができたなら、次は道具類の準備である。

今回、衣装や道具類について、学生たちと次のような約束事を決めて取り掛かった。

・画用紙や絵の具など基本的な文房具類は教員が用意

する。

・衣装や道具など、自分たちの手持ちのものを工夫して使用し、できるだけ購入しない。

なお、これらの作業を始めた5月頃には公演先が未定であったため、音響や照明などは特別なものは使用せず、いわゆる少し大きめの保育室程度の設備で公演できるように準備を進めることとした。

そのため、背景は模造紙を2枚繋げたものに絵の具で描き、ホワイトボードなどにS字フックで取り付けることにした。

このように道具等の準備をしながら、並行して劇の内容の稽古がスタートした。

いざ、実際に動きをつけて演じてみると、自分たち考えた台詞ではうまく伝わらない、動線が繋がらず次の歌の伴奏を弾かなくてはいけないのに間に合わない、用意した小道具が当初の想定ほど見た目の効果がない（例えば、ミルク壺が割れるインパクトが出ないなど）、背景を変えたいのだけれど舞台袖から次の背景を持ってくる人員がいないなど、多くの問題点が浮き彫りになってきた。

これらの問題について、筆者のアドバイスなども参考にしながら、少しずつ試行錯誤を繰り返していく作業が続いた。この作業を通して、当初はほとんど会話のなかった学生同士がお互いにアイデアを出し合い、実際に試してみても忌憚なく意見を言い合うというコミュニケーションが自然と生まれるきっかけとなった。

また、この時期の学生からよく聞かれたのは「道具類は先に時間をかけて作っても意味がないことが多い」という反省点である。例えば、「白雪姫」では森の様子を舞台上に再現するためにダンボールで大きな木や草などを製作していたが、実際に動いてみるとそれらが自分たちの動きを阻害する、あるいは次の場面に転換するとき片付ける要員がいないなどの問題点が見つかったし、「ヘンゼルとグレーテル」ではヘンゼルが囚われる檻をかなり時間をかけて作っていたが、実際に使用してみると大きすぎて、魔女たちが動くスペースが非常に狭くなったため、かなりサイズダウンが必要となった。

実は、この傾向は今期の学生だけに限ったことではなく、筆者が前任教で担当していた学生たちにも多く見られた。おそらく彼らは「劇を作る」イコール「モノを作る」という感覚で捉えていると思われ、筆者が「まずは内容から」と繰り返し説明しても、その真意が初めから理解されることはほぼない。学生にとって「劇の内容(ソ

フト面)」は「わかりやすく目に見える成果」が得られにくいことが一因であろうと想像できる。

このように実際の動きをつけながら稽古を進めていくと、自然に学生の方から「こんなふうにしたい」という要望が上がってくるようになった。例えば、「白雪姫」では舞台正面の背景の部分に小人の家の外観を作り、実際に扉から中に入ることにしたいという要望が出された。そのためには背景を掛けているホワイトボードの脚部の横棒が邪魔になるというのである。同じ問題が「ヘンゼルとグレーテル」の魔女の家のかまどでも浮上した。魔女を思い切りかまどに押し込むという演技をしたいのに、ホワイトボードの脚部が気になって、どうしても勢いが止まってしまうのである。これらの問題を解決するために、さまざまな意見が出された。ダンボールで枠組みを作るという案もあったが、その場合、壁状の段ボールを両端で支えておく必要があり、人員が足りない。上から紙を吊るす形にすると、模造紙では扉が薄すぎて開閉できず、ダンボールで補強すると模造紙がその重みに耐えられず歪んでしまう。それらの問題は最終的に店頭によくある「のぼり」を立てる支柱にダンボールで作った扉を結束バンドで固定し、その支柱2本の間に横棒を渡し、その棒に背景を吊るすことで解決した。

これによって、公演場所に関わらず、持ち運び可能な背景と大道具が完成することとなった。そして同時に、どちらのグループもこの装置の背面を舞台袖がわりに使用することで、上手や下手にはけなくても舞台転換が可能となった。さらに、背景の掛け替えを演技の一環として行うなど、様々なアイデアを取り入れていくことで、少人数での劇の進行が少しずつスムーズになってきた。

③ 本公演直前

このように公演の準備が少しずつ整ってきた6月下旬になっても、コロナ感染状況は予断を許さず、近隣の幼稚園・保育園を訪問しての公演はなかなか難しい状況が続いていた。そのため、今回は赤穂市民会館の1室(リハーサル室)を借りて公演を行い、赤穂市在住の3歳から小学校3年生までの子どもとその保護者に参加を呼びかけることにした。

イベント名は「みんなで観よう!夏休み 親子 de オペレッタ!」とし、7月27日(水)の11時から開演とした。募集は赤穂市内の小学校と幼稚園にチラシを配布することで行なった。各グループでそれぞれの題目に合わせたイラストを描き、それを元にチラシを作成した。チラシには応募フォームのURLをQRコード化したも

のを掲載し、気軽に応募できるように工夫した。

このチラシを7月8日付で赤穂市内の小学校や幼稚園に配布を依頼したところ、1週間後には定員60名が満席になるほどの申し込みがあった。この現象は、赤穂市においてこのような文化的な活動に対する興味が非常に高いことを示唆していると考えられる。

そして、このスタイルは、従来、筆者が行ってきた「こちらから幼稚園や児童館などに出向いて、もともとその場に集まっている園児たちを対象にする」公演に比べ、「わざわざこの公演を見るために集まってきている子どもたち（従来よりも年齢層が広い）やその保護者を対象にする」公演であるという点が大きく異なっている。それだけに、学生たちには「来てくださる方々の時間を無駄にしない」「来てよかったと思える」公演にしないでほしいという意識づけを行った。

学生たちの意識もチラシが完成した頃から少しずつ高まってきた。それと同時に演じる場所が定まったことにより、その部屋の形状に合わせた演出を取り入れることができるようになった。今回の公演場所であるリハーサル室は、バレエの練習などに使用される、グランドピアノ1台が設置されているフローリングの部屋である。そのため、客席と演じる側との間に段差はなく、観客は床に直接座る形で劇を鑑賞することになる。学生たちは「子どもたちの目線でどう見えるか」を意識しながら一つの動きを確認していった。

また、白雪姫を助ける王子や、森に迷ったヘンゼルとグレーテルは観客席の後ろにある扉から登場する演出を取り入れることで、見ている子どもたちが飽きないように工夫した。

この観客と出演者の距離を縮める工夫は、前述の登場方法などによる物理的なものだけには限らない。学生たちは、心理的にも子どもたちを劇の内容に取り込むためのアイデアを考え始めた。その工夫の一つが、子どもたちの反応を劇に取り入れるというものである。例えば小人の家を見つけた白雪姫が「どうしよう？お家、入ってもいいかな？」と問いかける、魔女をかまどに押し込むシーンでヘンゼルとグレーテルが子どもたちに呼びかけ、一緒に掛け声をかけてもらう、など自分たちが演じる中で子どもたちを巻き込める部分を随所に見つけ、お互いに相談しながら内容を作り上げていった。

ただし、公演1週間前の通し稽古の段階では、まだ演出が固まっていない部分があったり、ヘンゼルやグレーテルのダブルキャストの衣装がバラバラで同一人物に見

えなかったり、学生同士が照れてしまって声が小さくなったり、セリフが棒読みになったり、とまだまだ仕上がりに程遠い状態であった。これには学生たち自身も焦りを感じたらしく、前期試験が近づく中、少しでも集まれる者同士で集まって練習や作業をし、お互いに演技にダメ出しをし合うなど、集中して仕上げに取り掛かる様子が増えてきた。

さらに公演日の3日前には本番を想定して、劇が始まる前の導入部分も含め、実際の子どもの反応を想像しながら演じる通し稽古を行なった。この通し稽古は、2つのグループが鑑賞し合い、お互いに感想や改善点を言い合うことで、公演をさらに良いものにしようという意識が高まっていった。

④ 公演当日

実際に公演を行う部屋は当日にしか使用できないため、学生たちは前日に道具類を搬出できる大きさに解体し、積み込み作業を行なった。そして、当日、開場までの1時間半を会場準備と簡単なリハーサルに費やした。

会場準備では、背景や道具類の準備以外にも、舞台袖の代わりに使用するためにグランドピアノの下を暗幕で隠したり、客席と演技スペースの間に養生テープで仕切りの目印を貼ったりというような、大学での練習では行わなかった作業も含まれたが、学生たちは自分のグループだけでなく、様子を見ながら別グループの準備や全体の会場設営など自然に手分けして手際よく作業を進めていた。

やがて開場時間になると、廊下で来場者の受付にあたる教員の横で2名の学生が自主的に検温や手指消毒の手伝いを始め、残りの学生たちは早く来た子どもたちが飽きてしまわないように、手遊びなどでさまざまな試みを行っていた。これら一連の流れは、事前の想定はしておらず、学生たちの自主性に驚かされた部分である。

そして、本番である。まずは「ヘンゼルとグレーテル」続いて「白雪姫」の順番で行った。開演前の手遊びなどですでに子どもたちとの間に関係性が生まれつつあったため、各演目の導入時から子どもたちは非常に積極的に反応していた。そのリアルな反応が学生たちの緊張を少し和らげたのか、どちらの演目でもアドリブのセリフが次々と飛び出し、子どもたちを巻き込んで生き生きとした舞台を作り上げることに成功していた。

終演後には作成した小道具類を子どもたちにプレゼントするなど、短時間ながら交流を深めることができた。

3. 体験後の参加学生の意識調査

(1) アンケートの実施

公演終了後、今回の体験による学生自身の気づき・学びを明らかにするため、アンケートを実施した。アンケートは大学のポータルサイトを用いて公演日翌日の7月28日から8月5日までの期間に行い、12名の回答を得た。なお、このアンケート結果を個人が特定されない状態でもちいての報告を行うことについては、12名全員の了承を口頭で得ている。

アンケートの質問項目は以下の通りである。

問1 あなたは今回の劇体験になぜ参加しましたか？

(複数回答可)

【選択項目】

- ・子どもに関わる体験をしたかったから
- ・表現することがもともと、得意ではないから(克服したくて)
- ・表現することがもともと、得意・好きだから
- ・何となく、このゼミに来てしまったから(あまり深く考えていなかった)
- ・その他

問2 問1で「その他」を選んだ人はその理由を書いてください。

問3 発表を終えて、あなたの「表現」に対する感情に変化はありましたか？

【選択項目】

- ・いい方向に変わった
- ・悪い方向に変わった
- ・どちらともいえない
- ・変わっていない

問4 今回の体験で、あなたが劇を作る上で大事だと感じたことは何ですか？(複数回答可)

【選択項目】

- ・ひらめき・発想力
- ・見通しを立てる力、計画性
- ・コミュニケーション能力
- ・演技や歌・ピアノなどの技能
- ・いい台本
- ・絵を描いたり、製作物を作る技能
- ・その他

問5 問4で「その他」と答えた人は具体的にその内容を書いて下さい。

問6 あなたにとって「一つの役を演じる」上で最も大事だと思うことは何ですか？(自由記述)

問7 今回の体験の満足度は全体としてどれぐらいですか？

【選択項目】

- ・とても満足
- ・まあまあ満足
- ・普通
- ・ちょっと不満
- ・とても不満

問8 問7の理由を簡単に教えてください。(自由記述)

問9 もしも、来年の3年生が同じことをやるとしたら・・・その時期はいつが妥当だと思いますか？

【選択項目】

- ・今回と同じ(3年前期)
- ・実習が終わった後(3年春休みから4年前期)
- ・それ以外の時期
- ・もう、ゼミではやらないほうがいい

(2) アンケート結果

アンケートの結果は以下のとおりである。

問1の参加理由については、1名だけが特に意図を持たずに参加しているが、残りの11名は「子どもに関わる経験をしたかったから」と答えている。また「もともと表現が得意」なので参加した学生が2名にとどまるのに対し、「もともと表現が苦手で克服したくて」参加した学生が5名もいた。なお「その他」と答えた学生はいなかった(fig.1)

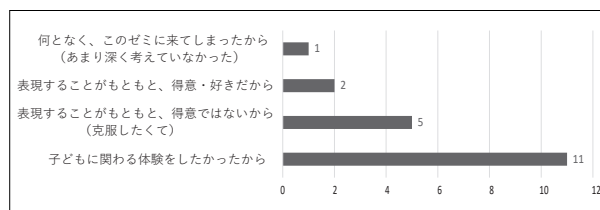


fig. 1 : 参加理由(複数回答)

問3の、発表後の「表現」に対する感情に変化については、解答した11名がすべて「いい方向に変わった」としている。(fig.2)

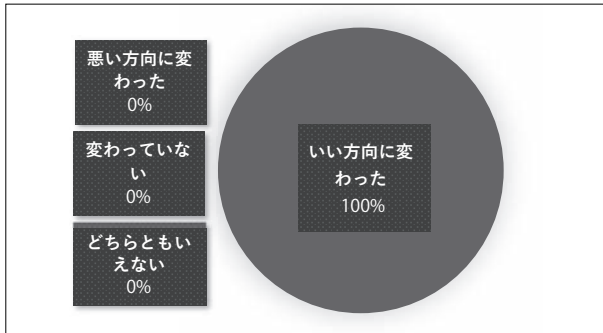


fig. 2 : 発表後の「表現」に対する感情変化

問4の劇を作るうえで大事だと感じたことについては、解答者全員が「見通しを立てる力・計画性」「ひらめき・発想力」と答えている。次に多いのが「コミュニケーション能力」(8名)、「演技や歌、ピアノなどの技能」(6名)と続き、「製作物などの技能」や「いい台本」は2名ずつにとどまった。なお「その他」と答えた学生はいなかった (fig.3)

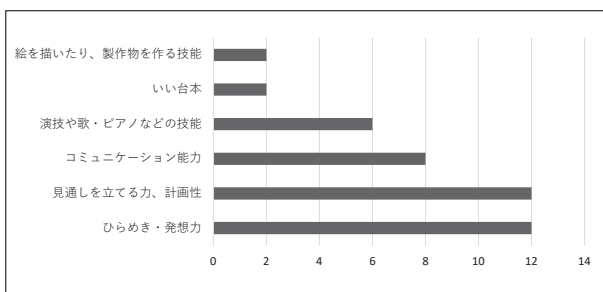


fig. 3 : 劇を作るうえで大事だと感じたこと

問6の「一つの役を演じる」上で最も大事だと思うことについては、自由記述であったため、様々な解答がみられた。中でも多かったコメントとしては、「役になり切ること」や「キャラクターを確立させること」(6名)、「恥を捨てること」や「観客への意識を持つこと」「仲間との意見交換をすること」などが2名ずつという結果になった。例えば、キャラクターの確立という点では「小人は3人いたので3人の個性が出るようにそれぞれの性格などを考える」「その役に対してその役の性格や、動きなど、どういった役にしていくかを向き合うことが大事である」などという意見が見られ、自分が演じるキャラクターが確立させると、その芝居を受ける相手の見え

方も変わってくることに言及しているコメントも見られた。(fig.4)

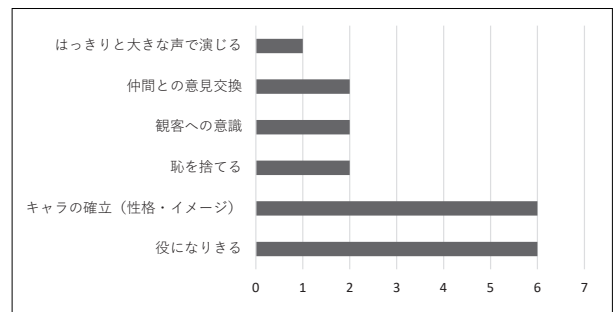


fig. 4 : 「一つの役を演じる」上で最も大事だと思うこと

問7の今回の体験の満足度については、解答者全員が「とても満足」と答えている。(fig.5)

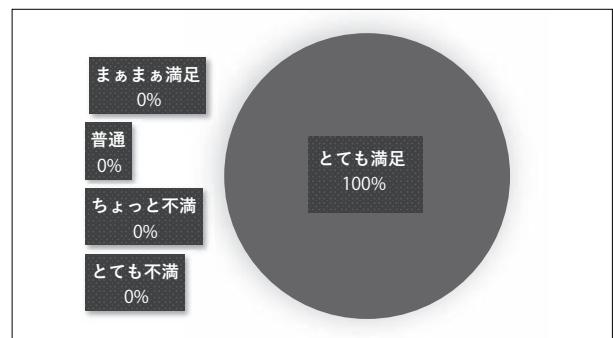


fig. 5 : 今回の体験の満足度

問8の満足度の理由についても自由記述であったため、様々な解答がみられた。中でも「観客(子どもたち)が楽しんでくれていた」や「初めての(子どもと関わる)経験だった」(7名)、「一人ではできることではなくて、みんなで一つの舞台を作り上げたこと」(6名)、「自分が楽しかった」「演じる(表現する)ことに自信がついた」(5名)などが多く見られた。「台本から衣装、背景全てを自分たちで作って繋げていくのがどれだけ大変で、どれだけ達成感が生まれるかが分かったから」のように、大変なことをみんなで乗り越えたという達成感を味わった学生は多かったようである。また、「見通しをもって活動するということを改めて学ぶことが出来ていい経験となった」というように、準備の大切さを実感した学生も多かった。(fig.6)

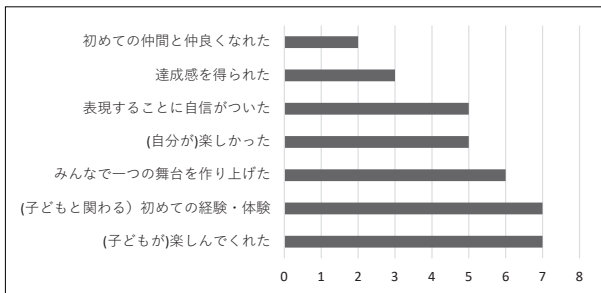


fig. 6 : 満足度の理由

最後の問9, 今後の実施時期については, 1名だけが「実習終了後」を選んだが, 残りの11名は「今回と同じ時期」と答えている。「それ以外の時期」や「もうゼミではやらないほうがいい」と答えた学生はいなかった (fig.7)

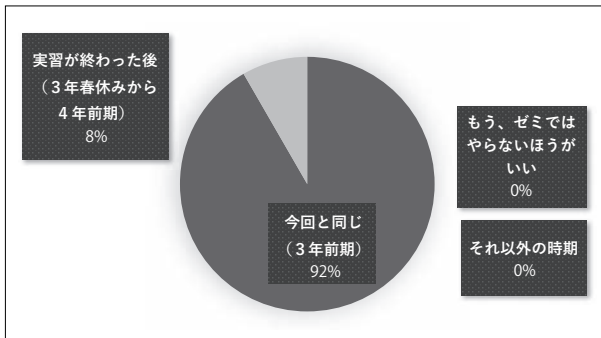


fig. 7 : 次年度の3年生が挑戦するなら最適な時期

4. 考察

ここまで、公演終了までの学生の実態と、学生自身が今回の体験をどのように感じているかのアンケート結果を示してきた。この章では、それらをもとに今回の表現活動がどのように学生の学びにつながったのかについて考察を行う。

まず、この活動に参加する前の学生の意識についてである。

アンケートの結果に見られるように、今回参加の学生たちの中に表現活動がもともと得意な者は非常に少ない。ほとんどの学生にとっては「劇を作ること」よりも「子どもたちと関わる体験ができること」の方が大きな意味を持っていたと考えられる。これには、彼女たちがコロナ禍で対面授業が制限される中で大学生活が始まった学年であり、これまでほとんど実際に子どもたちと関わる活動ができなかったという、この学年に特有の事情が一因となっているのかもしれない。

ここで、興味深いのはむしろ「表現活動が苦手だから」参加したという学生が5名もいたという事実である。前

述のようにこの学年は (子どものみならず) 圧倒的に人との直接の関わりが少ない学年である。その彼女たちが3年に進級し、いよいよ実習が現実に目の前に迫ってきた時に、人前に立つことへの不安を感じ「少しでも人の前で表現することに慣れることができれば」と考えたのは自然な流れだといえる。

そして、実際の公演を終えて学生たちが感じたことは、「一人一人の技能」よりも「仲間と相談すること」や「アイデアを出し合うこと」など、全員で作るためのコミュニケーションの大切さであったことも特筆すべき事項であろう。今回の公演には、ピアノが非常に得意な者、絵を描くことが好きな者、ふと思いついて口にするアイデアが独特でその意見が重宝される者など、さまざまな個性を持った学生が参加していた。学生たちはお互いの個性を認め合い、苦手な部分は他の人に助けをもらいながら、自分たちなりの努力を重ねていくことで、最終的に「やり遂げた」という達成感を得ることができたと考えられる。

また、今回の体験について「正直めっちゃめっちゃ忙しかったけど、忙しいからこそ計画性の大切さを感じたし、チームワークの必要性も身をもって体験出来たなと感じています！」などと、教育保育職における見通しや計画性の大事さに気付いたことを理由に、次年度以降も実習前の3年前期に行うことの意義を指摘している学生は多い。

さらに「初めは、急に目つきが本気になる先生が怖かったです。でも、私たちの劇に本気で向き合ってくださって、良いものを作ろうとしてくださっている気持ちがとても伝わり、最後までちょっと怖かったけど、とてもありがたかったです！」や「演技をすることが簡単ではないし自分では上手く言えてると思ってても他の人から見たら棒読み聞こえたり、恥が抜けず役になりきれなかったり練習では色々言われて、「自分ら別に俳優になりたいわけやないしそんなガチでやらんでもええやん」って思ってたんですけど、人に伝えるにはやっぱり手を抜かずに練習して本気で取り組むのがかっこいいし人前で演技をするという覚悟なのかなって思いました。」などという筆者に対するコメントからは、「本気で取り組む」ことの大事さへの学生自身の深い気づきを読み取れる。

このように、今回のゼミ活動でのオペレッタ公演は、学生たちにとって「大変だったからこそ頑張って、みんなで一つのものを作り上げた」という達成感、「子どもたちが楽しんでくれた」という手ごたえを感じるこ

で倍増し、最終的に「楽しかった」という本人たちの満足度に結びついたことが分かった。また、それは決してもともと友達同士の仲間だからこそ得られる満足ではなく、「名前も知らなかった人」と一緒に、時間的にも精神的にも追い込まれる中でコミュニケーションを取りつつ協力し合い、意見を出し合い、最終的に作り上げたことによる充実感も含まれていると考えられる。さらに、教職保育職において「見通しや計画性」や「ひらめき・発想力」が非常に大切であることを実感するなど、学生自身の気づきや深い学びにも役立つことが示されたといえよう。

今後の課題としては、当初の目標の一つであった「表現とは何か」という当ゼミの大きなテーマに基づき、今回参加した学生たちがどのように自らの研究課題を発見し、この経験を活かしながら卒業まで学びを深められるように導いていくかという点や、地域連携の観点からこの活動を一度きりのイベントではなく、どのように持続させていくかという点、今回の学生の気づきや学びを如何に下級生たちに伝え、全体的なレベルアップを図っていくかという点にあると考えている。これらについては引き続き検討していく。

文献

- i 阿部真子『表現領域における指導力育成につながるオペレッタ体験の有用性と展望』京都橘大学研究紀要 第44号 P.25～P.43, 2018
- ii 阿部真子『コロナ禍でのアウトリーチ活動の実践～「大学とこども園（保育園）をつなぐ双方向型でのオペレッタ公演」の試み』関西福祉大学研究紀要 第25巻 P.13～P.21, 2022